桂離宮の造営・構成に関する考察

新潟大学 工学部 正○鈴木 哲
〃 〃 〃 大熊 孝
〃 〃 〃 矢島基臣
日本住宅公団 〃 小野沢 透

1．はじめに

桂離宮の建築物や庭園に関しては、今まで様々なすぐれた研究がなされてきている。それらを参考にしつつ、主として庭園の造営と構成に関する2・3の考察をのべたい。なお、桂離宮に関しては、実際の測量を充分おこなうこと等は困難なので、そのため数度の参観時等に調べた資料や写真等と、既に公表されている資料・著書等を参考にして考察をすすめた。その際、森蘊氏のすぐれた観察・卓見には啓発されるところが大きかった。また森氏の著書には、実際に測量されたデータも示してあり、それらも参考にさせていただいた。ここに感謝の意を表します。

また、桂離宮は、360年前の第一代八条宮智仁親王の造営にかかる部分と、第二代智忠親王の造営にかかる部分があり、造営に時間的ずれがあったこと，また庭木の枯損や更新等で当初と若干の変化があったと考えられるが、本考察では、現状の桂離宮を対象にして考えた。

2．水害防備に関する検討

(1) 笹垣 ①位置：桂川右岸堤防の法肩に、堤防に沿って細長く設けられている。位置は図1に示した（寛永10年頃の作図とされている古図にはまだ設けられていないようである）。② 竹の種類：ハチク（淡竹）が主体で、途中に桜が植えられている（写真1）。飯島他著「庭木と緑化樹2」によれば、「ハチクは耐水性の強いタケで、したがって年々出水のあるような土地柄の竹林に適する」とある。③構造：生長した竹を生きたままおりまげ、垣に仕立てている。葉も枝も密になっているため、水害時には (i) 水をとおしやすく、(ii) 土砂等はとおさない構造になっている。以上から、水害防備を考慮して考案され、配置された生垣と考えられる。

(2) 穂垣 ① 位置：図1に示すように、敷地の桂川上流に面した境界に御所竹と穂垣がある。② 構造：竹の細枝を刈って厚く横に重ねたもの（写真2）で、笹垣と同様、水害時は水をとおしやすく、土砂・流木等の流入を防ぐのに適した構造になっている。穂垣や笹垣の位置に板塀や土塀を用いれば、洪水時に倒壊や流出はまぬがれないものと判断される。以上から，穂垣も、水害防備と美観と自家竹林利用を考慮して造営されたものと考えられる。水害に弱いマダケ林は、穂垣内側か、建物西側（洪水時は建物の下流側）にまもられる形であり、前者は庭園林種として、後者は主として用材林として利用されたと考えられる。

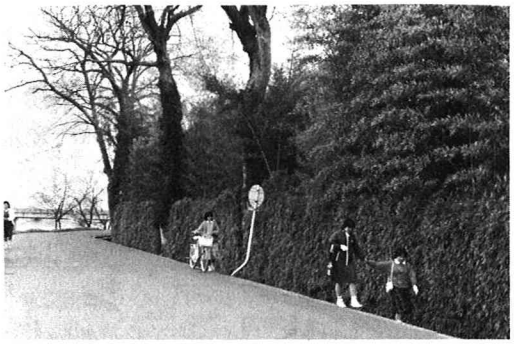


写真1：笹垣（桂川下流方向を眺む。）

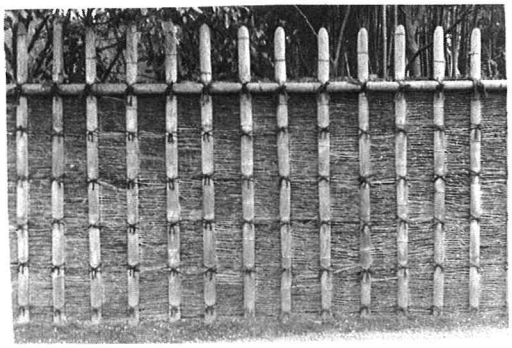
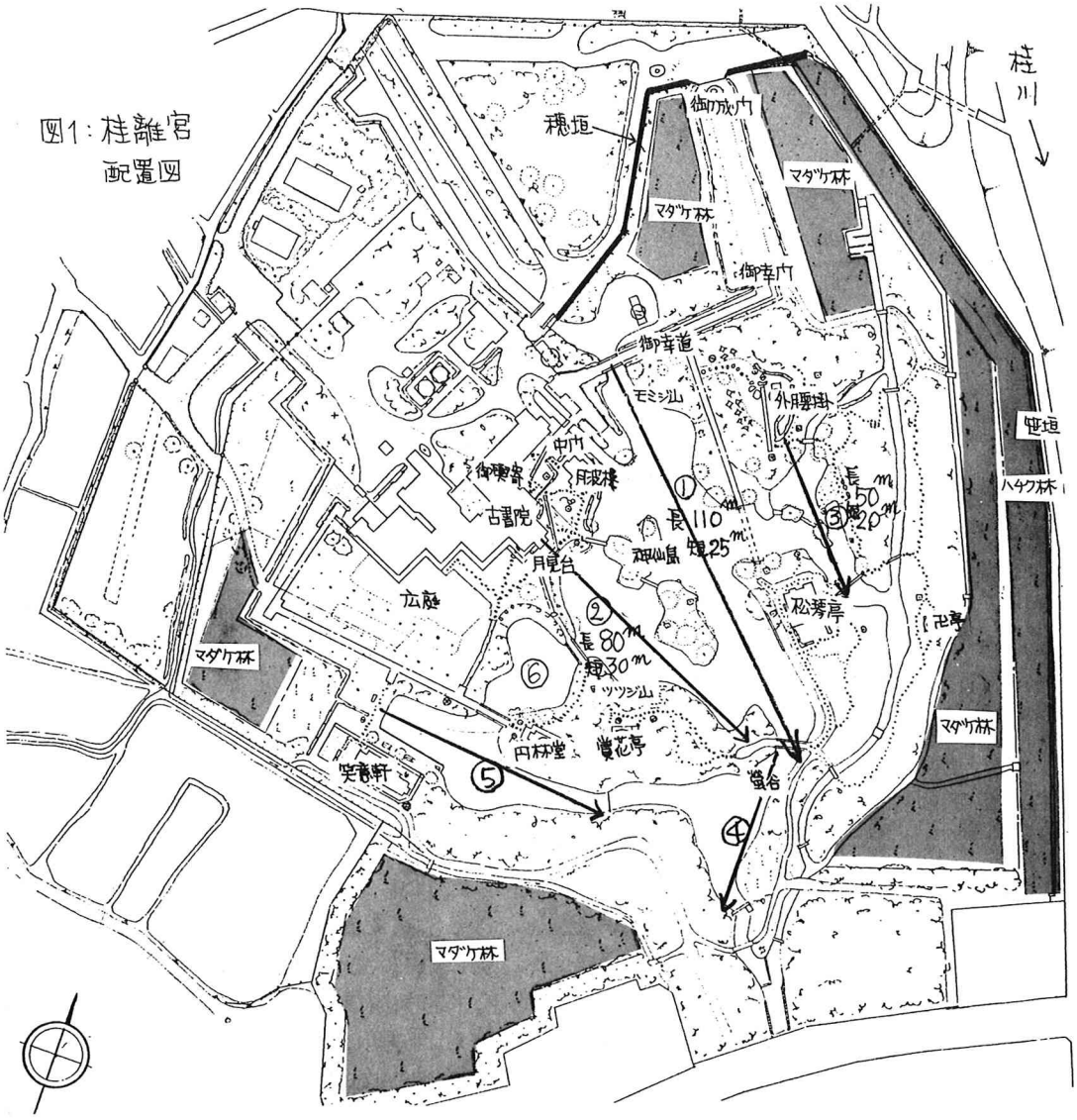


写真2：穂垣

図1：桂離宮
配置図



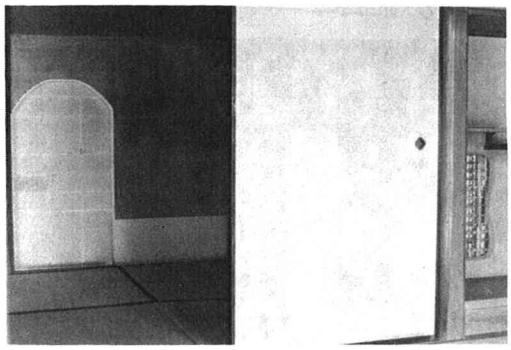


写真3：松琴亭茶の壁面上の水位跡

(3) 松琴亭茶室壁面上の水害跡線と書院の床の高さ

松琴亭茶室や笑意軒の壁に、水害時の増水位跡が明らかである。松琴亭茶室の場合は、床上1.39m であった。これは、造営以来三百数十年の間の最高水位を示すと考えられる。ハンドレベル等で観察した結果、この水位は、古書院月見台桁下とほゞ同じであった。これから考えて、住居建築物である書院の床上浸水はなかったものと考えられる。書院の高床は、美観や収納等の観点の他に、水害防備の点にも考慮をおよぼして造営されたものと考えられる（尚、機会を得て、レベルで測定を行いたいと考えている）。

3．池の形・池の長軸方向と庭園の景観

桂離宮の池の主な水面を、便宜的に図1に示したように、①～⑥にわけて考える。①～④は、智仁親王の造営にかかるもので、これらについて考察する。森蘊氏は著書で、①の位置には、野川のようなものが前からあった（新版桂離宮，創元社）とのべている。①～④はいずれも細長く、その長軸は北西から南東にむかっている（④はほゞ南北にむいている）。特に①と②は細長く、一方の端に立つと汀線がタテに視線を導き、対岸は極めて遠く感ぜられる。御幸道の土橋や古書院二の間から眺める（写真4・5）と、大きな池があるように感ぜられる（土橋からは、直径110mもの池があるように見える）。土橋では両側の刈込み生垣で、また二の間からは障子等で左右の視野が限定されると、一層その効果が増す。また北側からみると対岸は逆光となり、空の明るさに比しシルエット効果で暗く見え、太陽の位置によっては、両岸の木立のかげが水面におち、一層暗くなり、遠く、深く、静寂な感じをいだかせる。逆に、螢谷から書院側をみれば、遠くに明るく輝く白壁の御殿が、日かげの螢谷と比して一層華やいで感じで遠望できる。細長い池でシルエット効果をだすのは、北西－南東に長軸をとるだけでなく、北－南や北東－南西でもよいわけであるが、観月の観点からすれば、北西－南東しかない。中秋の名月の昇ってくる様を池にうつして眺めるには、長軸を北西－南東にするしかないのである。

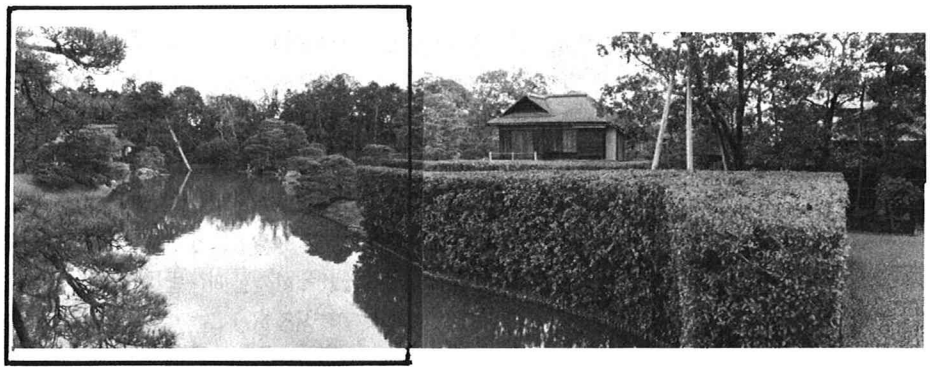


写真4：御幸道土橋より螢谷を眺む。土橋上に立ってみると、生垣で左右の視線がさえぎられ□のように見え、非常に大きな池があるように感ぜられる。

写真5：古書院月見台前。この間からみると、□のように見え、深遠な感が強い。

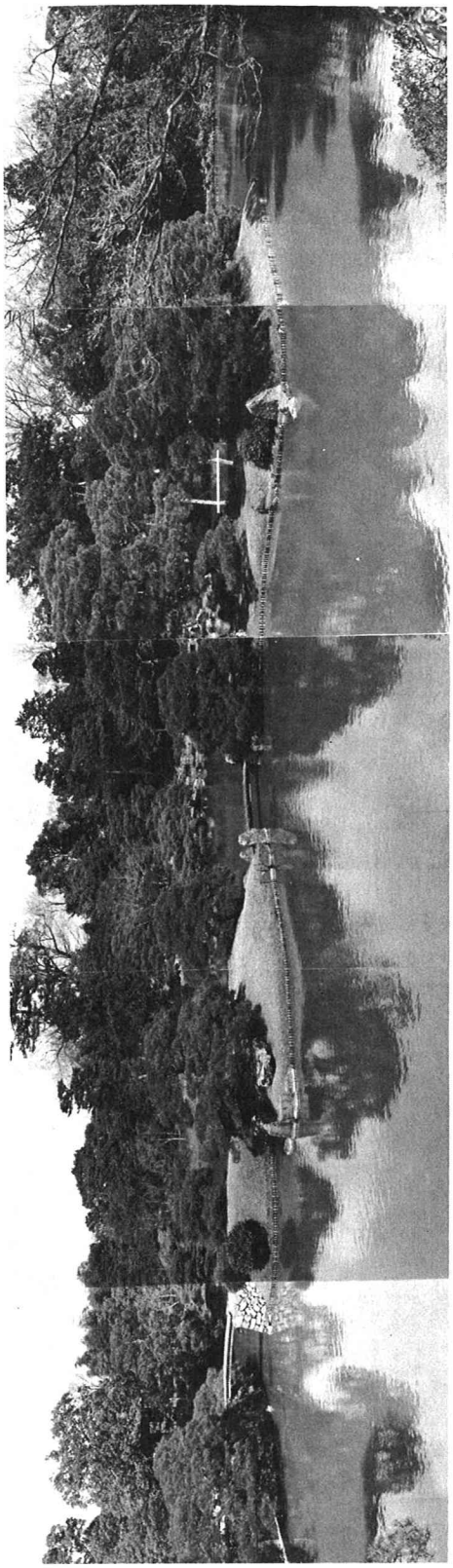


写真6：古書院見台前土橋わたり、神仙島を望む。水平に並ぶ汀線にみちびかれ、視線は左右に動き、広々とした感じをうける。特殊な空間で立体感あり。

この北西から南東に細長い池を横から、即ち短軸の方向に眺めると感じはまるで異ってくる。細長い池のため、島も長軸に沿って配置される結果、前では縦長で視線を遠方へ（上下方向へ）導いた汀線が、今度は水平に左右に並び視線を左右に導びく結果、視界は左右にひろがり、広々とした感じとなる。日中では、太陽が上から照らす結果、影が少なく、明るい感じになる。午後、太陽を背にうければ一層明るさをます。しかし、この地点も、朝では逆光となりシルエット効果を示す。対岸から眺めれば、その逆になっている。

このように、桂離宮の池の形・配置は、時間と共に、廻遊と共に、複雑に特徴的に景観が変貌するように考案されたと考えられる。（④は、ほゞ南－北にむいている。ここは、周辺に木立がせまって深山幽谷の感じで、観月には関係ない。⑤は、ほゞ西－東のため、暗くないが、後日するように、ここは生活的空間であり、特に暗くする必要はない）。

4．庭園空間の区分

桂離宮の庭園は、導入空間（御成門－御幸門－御幸道－御輿寄）を除いて考えると、3つ程に区分されているようにおもえる（それぞれの空間は重なりあい、影響しあうので、更に複雑ではあるが）。

書院南側の広庭は、馬場、弓場、鞠場等として、智仁親王が日常的に使用されたところといわれ、簡素で生活的空間といえよう。ここには、智忠親王の時代に、田舎屋（農家風）の笑意軒がつくられたが、窓ごしに畑の農夫の仕く姿を眺められたといわれ、極めて日常的な建物であり、また祖先をまつた円林堂もつくられたが、これも私的な生活的なものである。汀線も整然したクイの列からなり、人工的で簡素である。この一帯は生活的空間といえよう。

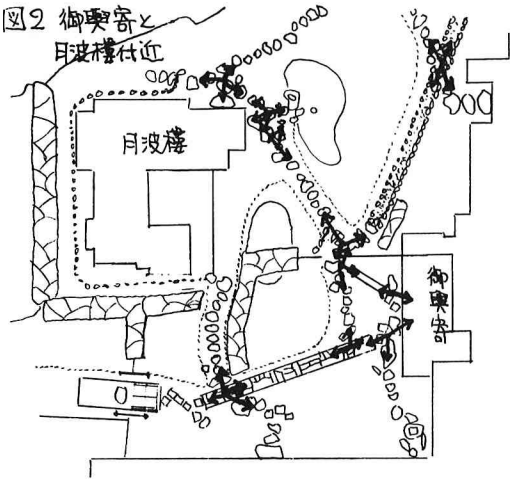
これに対し、対称的なのは、松琴亭前の空間で、汀線のほとんどが角石か州浜のような丸石でつくられ、クイはみられない。ここを仮にAとよぶ。汀線に関して、Aと生活的空間の中間的な形は、神仙島を含む中央部分である。これをBとよぶことにする。神仙島の汀線はクイが主体で、若干の石を配している。Aの中央にも島がある（写真7）が汀線は石である。Bの神仙島の石の密度はうすくなっている、逆にいえば、Aの汀線の石の密度が高いことになる。Aは、二等辺三角形をしており、汀線が角石からなるので凸凹の長さも考慮すると、長・短軸は半分程度であるのに、

写真7：松琴亭前。数歩前に歩めば、景観ははるかに立体化する。苑路もわずかに上下して続いている。

写真8：笑意軒と広庭の一部。広庭は馬場等に利用され、明治になって芝生が植えられたという。笑意軒前は船付場。その他の汀線はクイからなる。

汀線の全身はそれほどちがわない（Aの汀線全長270m，Bの汀線全長300m）。水面積は、450m^2に対し2800m^2という風に5倍以上もちがっている。つまり、Aは、Bの景観の比例的収縮ではなく、質的にもちがった縮がおこっているようにおもえる。また、長・短軸が短かいことによって、人はBよりも大きな俯瞰角で外縁を眺める結果、より立体的であり、樋口氏[注1]の明らかにした俯角10°も容易に得られる。また視点を少し汀線に近づけたり、少し上・下させるだけで、Bよりも大きな俯瞰角の変化を形成することができる。これらの結果、人の視点と思考は、地上（現実）からはなれ、高所から地上を見、考えることになる。Aはすぐれて哲学的思索的空間と考える。暗い谷あり、けわしい山ありのBは、自然的空間と考える。これらの空間が相互に影響しあって、全体で統一されているように考える。

図2 御興寄と月波楼付近



5 選択の多様性

これらの空間をえらび、または結びつけ、その中を人は歩み、たたずみ、休み、または引きかえす。その選択の多様性が豊かである。図2は、御興寄と月波楼付近の飛石と延段の配置である。多様な順路をえらぶことができる。どういう順をえらび、どういう歩み方をするか（どこでたたずみ、どこで休むか等）は、各人の自由である。その点で桂離宮の庭園は自由な創造的な空間である、といえる。

注1：樋口忠彦，景観の構造，技報堂，1976